

新型コロナウイルスの世界的な流行から2年がたとうとしています。今回の特集では、新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の委員である、平本健太氏と岸田直樹氏を迎え、これまでの感染症対策や、日常生活の回復に向けた道筋などをテーマに鼎談（3人での会談）を実施しました。

新春 鼎談

私たちの暮らしはどう変わる？

札幌のポストコロナ

実施日 2021年11月29日
会場 豊平館(中央区中島公園内)
撮影時のみマスクを外しています

新型コロナ対策の今

新型コロナ対策を振り返る

秋元市長 この2年ほど、新型コロナウイルスへの対応に追われてきたという状況ですが、第4波のときの経験がその後の感染症対策のベースになっていると感じています。

平本教授 入院待機ステーションやPCR検査センターを適切なタイミングで増やすなど、施策を次々と打ち出したことが、第5波の抑え込みにつながったのだらうと専門家会議の委員の立場から見ても感じています。

岸田医師 そうですね。第4波のときはかなり厳しい体制でしたが、市や医療従事者の方たちが一丸となって今の医療提供体制をつくりあげたと思います。

平本教授 経済対策としての協力金や助成金なども、2年ほど経過する間にかなり整備されてきましたよね。批判もありませんが、札幌の経済を下支えすることに成功しているという意味では、一定の効果を得られていると思います。

ワクチンという武器で変化する対策

秋元市長 年代別に見ると、若い方の接種率はそう高くないことから、ワクチンに対してまだまだ心配されている方もいるのかなと思います。市で見ると、接種率は8割を超え、当初想定していた目標に近い割合まで来ています。**平本教授** 私たちがワクチンという武器を得て「これまで



感染症コンサルタント、札幌市危機管理対策室参与、札幌市新型コロナウイルス感染症対策専門家会議委員
岸田直樹

札幌市長
秋元克広

北海道大学大学院経済学研究科長、教授、札幌市新型コロナウイルス感染症対策専門家会議座長
平本健太

2010年から手稲深仁会病院感染症科チーフ兼感染対策室室長を務めた後、2014年に札幌メディカルアカデミーを立ち上げて代表理事に就任。2020年5月から札幌市危機管理対策室参与に就任し、市内の感染状況のデータ分析に基づく助言をしている

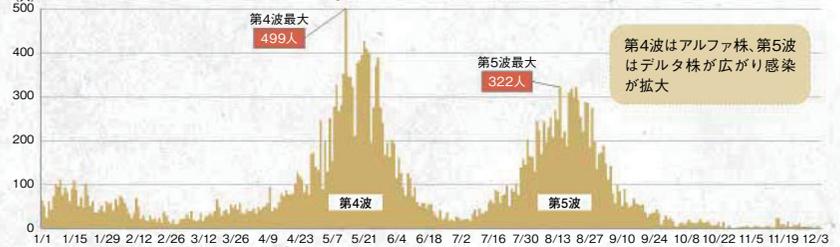
1997年北海道大学経済学部助教授、同大学大学院経済学研究科助教授、准教授を経て2008年に経済学研究科教授。2018年から現職。札幌市の新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の座長、まちづくり戦略ビジョン審議会の会長を務めている

とは違う戦略で戦うぞ！」という気持ちになってきたときに、新たな変異株であるオミクロン株の報道がありましたね。やはりこれまでの対策は見直さなくてはいけないのでしょうか。

岸田医師 オミクロン株でも基本的な対策は変わりません。ワクチン開発の影響は大きく、日本に限らず世界各国が、ワクチン接種によって新型コロナウイルス対策の軸足を移しました。これまでの厳しい行動制限から、それらを緩めて新型コロナウイルスとうまく付き合っていくという方向になっています。

しかし、まだ治療薬や検査技術も途中段階ですので、これからも対策は進化していくという気持ちでいてほしいです。新しい変異株の出現によって一喜一憂することがあるとは思いますが、ファイザー社・モデルナ社のmRNAワクチンはそれらに迅速に対応できる優れたワクチンです。感染対策は確実に前に進んでいますよ。

2021年の市内における新規感染者数の推移



日常生活の回復への道筋

今後の新型コロナウイルスの向き合い方

秋元市長 今後の感染拡大への備えとしてはいくつもありませんが、病床数の確保や、早い段階で医療につなぐこと、細胞に侵入するのを防ぐことでウイルスの増殖を抑える抗体カクテル療法など、医療提供体制は整ってきています。仮にこれまでより多くの感染者が出たとしても、十分対応できるようにできてきていると思います。また、経口治療薬を承認後に必要な方のもとに迅速に届ける体制づくりも行っていきます。

岸田医師 抗体カクテル療法や新たな治療薬の流通によって、陽性者がある程度出たしまった場合でも、重症化をかなり抑えることができれば、

再び行動を制限するのではなく、こまめでは許容しようという線引きができるのではないのでしょうか。市民の皆さんにも札幌市の流行状況や医療体制を正確に知ってもらい、その線引きを一緒に考えてもらえたら良いのではないかと思います。

平本教授 私は、第6波という大きな波が来たときにはある程度の自粛は必要だと思えます。慎重に行動することは重要ですし、対策におこりがあってはいけません。一方で、飲食店の第三者認証制度のような一定の有効性を持つと考えられるルールを適用しつつ、きちんと経済を回していく、そのための仕組みづくりも必要になってくると思います。

岸田医師 新型コロナウイルス対応は生き物を相手にするようなも



のなので、正解は時間とともに変わります。そのような新型コロナウイルスをインフルエンザと同じように思える未来をイメージして世界は医療体制を強化しています。そのためには、比較的強いワクチンの副反応を解消することや治療薬の開発、迅速にできる抗原検査などが必要になってくるでしょう。

平本教授 この2年間は、どちらかというと守りの対策が中心だったと思いますが、これからは攻めの対策といま

すか、経済を回しながら新型コロナウイルスを抑え込むということに知恵を出していくべきなのかなと思います。

秋元市長 市ではワクチンの接種履歴をスマートフォンに登録して持ち歩きやすくするという取り組みを12月から始めます（13ページに掲載。例えばそのような取り組みを試行する中で、感染対策と日常生活の回復を両立させる方策を形づくっていきたいと思っています。

新型コロナウイルスの経験を経て 次の10年とその先へ

秋元市長 これまで、地震などの自然災害は経験してきましたが、感染症のリスクは今回改めて認識させられました。新型コロナウイルスにかかわらず、再び感染症の世界的な大流行が起こったとしても、対応できる体制をつくる必要性を感じています。

岸田医師 私は感染症医なので、新型コロナウイルスに限らず「今後感染症ってどうなるのか」という質問を受けるのですが、

新型コロナウイルスの今後について市民から寄せられた疑問にお答えしました



岸田医師に聞く ここが気になる！質問コーナー

Q1

今はまだ、旅行することに周りの目が気になるのですが、抵抗がなくなる日は来るのでしょうか？

変異を続ける新型コロナが収束する時期を見通すことは難しいですが、移動することや感染してしまふこと自体が悪いという社会の雰囲気や考えをどうほどしていくかが課題です。感染対策を行っている場合にはとがめられないことが重要で、例えばワクチンを打ったり、検査を受けたりした上で旅行することは、抵抗を感じずに旅行できる一つの方法になるのではないかと思います。

Q2

いつになったらマスクを外せる日が来るのでしょうか？

マスク文化があるといわれる日本人の私も、上手に外せたらと日々思っています。一方で感染症対策として、新型コロナ流行以前から咳エチケットや感染症流行時の人混みなどではマスクの着用をしてきました。コロナ禍の今はマスクを着用することが基本ですが、人が多くない屋外など、マスクを着けなくても良いときに着けていることも多いと思います。その見極めができるように行政が必要な情報を伝えていくことが重要なかなと思います。

2022年を 迎えるに当たって

秋元市長 札幌のこれまでの100年は、人口がどんどん増えて街が大きくなりましたが、これからの時代はさまざまな面で持続可能な街にしていくな必要があります。経済、環境のほか、市民の健康も重要なテーマの一つ。感染症という経験を越えて、豊かな自然と都市機能が調和した街の魅力を将来につなげていくために、市民の皆さんと一緒にこの先の札幌をつくりあげていきたいと思っています。

